

鈴木正三における「経済倫理」について

笠井 哲

一 はじめに

経済倫理とは、経済生活における倫理的・心理的な規制をいう。具体的項目としては、勤勉、節約、正直、社会奉仕などで示され、生産・労働倫理や「職業倫理」、さらには、企業の指針を提示する「経営倫理」などで表される。これら経済倫理によつて、ともすると利潤のみ追求しがちな経済行為が正され、経済の合理的発展に道筋と方向性が示され、新しい文化が創造されるのである。

経済倫理の影響によつて、新たな経済のあり方が生み出されることもある。仏教の経済倫理が、禁欲や勤勉を説き、社会的施与の重要性を示し、自利利他の商いのあり方を育て、独自の職業倫理を提唱してきたことと日本の経済発展とは無縁ではない。日本人は、世俗的な生活における活動を重視する傾向を持っている。日本仏教において、世法と仏法の関係を強調したのが、鈴木正三である。彼の思想は、「世法即仏

法」であつて、世俗のあらゆる職業労働に神聖な意義を認める「職業倫理」である。

鈴木正三は、士農工商を身分制度としてではなく、職能として捉える人間としての自覚を出発点としている。現世の生活の中で仏道修行を実現しようとしている鈴木正三は、職業生活が仏教と矛盾しないばかりでなく、仏教そのものであるという。換言すれば、現実生活における職業倫理の実践のうちに仏教の本質があるとする。彼は仏教に基づく独自の職業倫理を、主著『万民徳用』で論じている。

本稿の目的は、鈴木正三における経済倫理としての職業倫理を考察することである。正三は『万民徳用』で、士・農・工・商の順で独自の職業倫理を説いている。それらについて検討する前に、まず彼の思想的な基盤を確認しておきたい。

二 世法即仏法と職業哲学

正三は「世法即仏法」を打ち出して、仏道修行の意味を転

換する。彼が基本としたのは、「修行の念願」であり、出家した僧の形ではない。例えば出家について、

仏法修行は三界出離の法也。故に出家と名付。若三界出離の旨なくば出家にあらず。願は三界出離の修行し給へかしの念願なり。として三界を離れるという強い願がなくては、形の上だけ出家してもまったく意味がないといっている。続けて、

仏語に、世間に入得すれば出世あまりなしと説給へり。此文は、世法にて成仏するの理なり。然ば世法則仏法也。華嚴に、「仏法は不異世間法。世間法不異仏法」如此説給へり。若世法にて成仏する道理を不用、一切仏意をしらざる人也。願は世法を則仏法になし給へかしの念願なり¹⁾。

と、世法は即仏法であると断言してやまないのである。

世法とは一般社会の道理、理法をいう。仏法とは、仏の教えということである。この両者が同一であるというのが、正三の信念である。出家した人が三界を離れる修行をするのと同じように、在家の人も修行するならば救われる。したがって、仏法の修行は、次のような理由で世法と合致するという。仏法修行は、煩惱を対治するものであり、心が弱くてはかなわぬものである。勇気を出して如何なる困難をも克服して、修行に努力する心が大切である。また職業に関して、仏法修行が、いろいろな業の障害を減尽して、一切の苦を去るといふ。この心は、士農工商の人々の上に用いて身心安楽となる

宝であるとする。

さて、正三の思想的背景には、中国仏教がある。正三が引用している『華嚴經』では、現実の世界が仏の顕現に他ならないことが、次のように述べられている。

菩薩はかくのごとく解すれば、一切の法は皆な悉く甚深なり、一切の世間は皆な悉く寂靜なり。一切の仏法は増益するところ無く、仏法は世間法に異ならず、世間法は仏法に異ならず。仏法と世間法と雜乱有ること無く亦差別無し²⁾。

また、仏法と世間法が相即相入していることが示されている。

仏法は即ち世間法なり、世間法は即ち仏法なりと知ると雖も、しかも仏法のなかにおいて世間法を分別せず、世間法の中において仏法を分別せず、世間法の中において仏法を分別せず。一切の諸法は悉く法界に入る³⁾。

正三は、こうした華嚴哲学を自分なりに消化して、「職業哲学」を創造した。すなわち、宇宙の一切の存在は仏の顕現、仏の分身であるから、一切の職業は仏の現れである。あらゆる職業が神聖で、平等で、社会に役立つ職能であるとする。正三はいふ。

本覚真如の一仏、百億分身して世界を利益したまふなり。鍛冶番匠をはじめて、諸職人なくしては、世界の用所、調べからず。武士なくして世治まるべからず。農人なくして、世界の食物あるべからず。商人なくして、世界の自由成べからず。此外所有事業、

出来て、世のためとなる。天地をさしたる人もあり、文字を造出たる人も有、五臓を分て医道を施人もあり。其品々限なく出て、世の爲となるといへども、唯は一仏の徳用なり。

ここにあるように、すべての職業は、元来同じ一仏の働きの現れであるから、形は違つてもみな世のためになる。したがつて、各自の職業に励むことが、仏に仕える仏行に他ならない、というのが正三の職業哲学である。

各自の身もまた仏性をそなえている存在であることを自覚して、横道にそれることなく職業に励むようにすることが、そのまま仏道の修行の成就、すなわち成仏であるという。正三は、職業を仏道の修行、すなわち人間の完成ないし自己救済の努力へと結び付けている。

三 士農工の職業倫理

まず武士については『万民徳用』に、次のようにいつている。

仏法と世法、車の両輪のようであるというが、仏法がなくても、世間において不自由はない。どうして車の両輪にたとえるのか。

この問は、当時支配階級の精神的支柱となりつつあった儒教を意識したものである。

正三は答える。仏法と世法と二つあるのではない。仏様の言葉に、世間の中に入つてしまえば、別に出世間があるわけ

ではないとある。仏法も世法も、道理を正し、正義を守り、五倫の道すなわち人の守るべき五つの道を正しくして、間違わない。私心のないのを世間の正直という。武士には、正直を第一とし生死を超える心を養つて、世法と仏法は二つにあらずと心得え、ひたすら奉公に励めという。

次に正三は、「農人日用」で、農民が農業に専心することで仏法修行が完成されると主張する。ある農民が聞いた。後生の一大事、すなわち死後の極楽往生を大切にして生前一心に修行することを疎かにしてはならないと思ひながら、農業に追われて暇がなく、むなしい今生を過ごして、未来に苦を受けるのは、無念の極みである。如何にすれば、仏果に至ることができのかと。答えていうには、農業がすなわち仏行である。それに心が入らない時は、賤しい職業であるけれど、信心堅固であれば、農業もやはり菩薩の行であるという。

すなわち、農業がそのまま仏法修行となるかどうかは、農民の心の持ち方如何で決まる。それゆえ、農業生活と別に信仰生活があるのではない。暇を得て、後生を願おうとするのは誤りである。必ず成仏を遂げんとする者は、極寒極熱の辛苦の業をなし、鋤鋤鎌を用いて、煩惱の叢茂きこの身心を鋤き返し、雑草を刈り取り、身心を責めに責めて耕作すべきである。身に暇を得たときは、煩惱の叢がさらに茂るものである。辛苦の業をなし、身心を責めるときは、この煩惱が消え

る。つまり、常に仏行をなしているのと同じである。農民が、農業以外に他にどんな仏行をする必要があるのだろうか。農民として生を受けることは、天より授かり給う世界養育の役人となることであるというのである。

このように、農業こそ天職との自覚を農民に促して、その職分に徹することが成仏に至るという強い信念を述べている。したがって、中村元氏が、

すなわち貧富の別はすでに前世から定まっているものであるから、それを問題とすることなく、ひたすらに農務に精励せよというのである。人間の運命の予定（Predestination）と勤労の尊重という点で、ここにわれわれはカルヴィンの職業倫理説を思い起こさせるが、しかしまた、ここには、中世的な身分的区別肯定の觀念と近代的な能動的活動的精神とが交錯しているとも解し得るであらう。⁵⁾

というのは正鵠を得ている。これについて今井淳氏が、しかし結果的にはこの思想が封建道徳の強調に終わっている。⁶⁾といっていることも重要である。

『万民徳用』では、次に「職人」の職業倫理が展開される。「職人」とは、その土農工商のうちの「工」に相当するものである。江戸時代になると、城下町をはじめ各地に職人集団が成立した。彼らの活躍は目覚ましいものがあつたが、職人は手間賃稼ぎが原則で、社会的地位も低かつた。

ある職人が聞いた。後生の菩提が大切であると知つていながら、もっぱら家業と渡世に追われるのみの毎日である。どのようにして仏果に至ればよいのであろうかと。答えていう。いずれの事業もみな仏行であるから、自らの生業において成仏すべきである。また一切の仕事は、すべてみな世界のためとなるということを知るべきであるとして、職人もまた各自の職業に専念すべきであるというのである。

四 商人の経済倫理——正直の道——

正三は、武士、農人、職人の後に、「商人日用」、すなわち商人の「職業倫理」を展開している。そもそも、多くの宗教は利益を増すように活動することに肯定的ではなかつた。しかし、正三は以下に見るように、営利を積極的に肯定している。この商人の職業倫理に、正三の経済倫理思想の特徴が、最も明確に現れている。

ある商人が聞いた。たまたま人間界に生をうけながら、つたない売買の業をなし、利を得んとする心休むときなくて、菩提に進むことかなわず、無念の至りである。教えを垂れたまへと。これに対して正三は、商人は利益を追求すべきであるとしている。

答云、「売買をせん人は、先得利の益べき心づかひを修行すべし。

其心遣と云は他の事にあらず。身命を天道に抛て、一筋に正直の道を学べし。正直の人には諸天のめぐみふかく、仏陀神明の加護有て、災難を除き、自然に福を増し、衆人愛敬、不浅して万事心に可叶。私欲を専として、自他を隔、人をぬきて、得利を思人には、天道のたたりありて、禍を増し、万民のにくみをうけ、衆人愛敬なくして、万事、心に不可叶。⁽⁷⁾

すなわち、人を喜ばして自分も儲けるという立場で、正直な心で利得を追求すべきであると教えている。悪い心や手段によって儲けることを「有漏善」といい、人を樂しませず之地に落ちてしまうという。道理になつたものが「無漏善」である。そこで、「無漏善」が、商人の職業倫理の中心となる。

この売買の作業は、国中の「自由」をなさしむべき役目の人々に、天道より与えられたと思ひ、身を天にまかせて利を得んとする心たゆみなく、常に正直を旨として商いをすれば、火が乾いているものにつき、水が低いほうへ流れるように、万事心になうべきであるとする。正三の「自由」は、あるものを必要とする欲求であるが、正三研究のパイオニアでもある中村元氏は、これを西洋の freedom に相当すると解釈し、ここにおいてかれは、ある意味における決定論 (Determinismus) を承認しながら、すでに決定せられた境地に安住して、人間の自由を実現しようとするのである。『商人なくして世界の自由ある

べからず。』ここで正三のいう「天」「天道」の代わりに「神」を、「自由」の代わりに「神の救い」を置くならば、殆どそのまま、カルヴィニズムに由来する西洋近代初期の資本主義倫理を見出し得る。⁽⁸⁾

と述べている。同様に芹川博通氏も、ここに展開されている正三の仏教的職業倫理と、そこにみられる彼の経済倫理は、近代西欧の資本主義の精神を生みださせた禁欲的プロテスタンティズムの倫理に匹敵する規模の大きなものである。⁽⁹⁾

といっている。

江戸中期以降、商品流通経済が進み、次第に商人の東奔西走の活躍が目立ち始めるが、身分的には最下位に置かれて、卑しめられていた。正三は、その商人を世界の「自由」を作る人と呼び、利潤の追求を積極的には認し、一般民衆の利益を増進することを心がけるようにも説いている。日本人の商売熱心は、こうした精神的基盤と決して無縁ではない。商売は熱心に、しかも不純な動機と不正な手段は用いず、正直に勤勉に、目的合理的に利益を追求して働くことは大いなる善である。人を騙すことや、いたずらに私利私欲をむさぼることが悪なのである。

正三は、商人がまず「得利」(営利)のための心遣いを修行し、もつぱら「正直の道」を学ぶべきであることを強調して

いる。彼のこの倫理観は、日本人の経済活動の理想として作用してきた。正直、勤勉といった徳目は、豊かではなかった日本人が共に生きるための知恵として、受け入れる余地があったとしても、正三の主体的思索によって、体系的に哲学化されて日本人の精神的基盤となったのである。

五 おわりに

鈴木正三は、職業そのものを一仏の分身と見なしている。したがって、すべての職業が平等であって、貴賤がなく、僧侶であっても決して上ではない。正三の考えは、各自が自分の職業に、全身を投入して私心なく励むならば、それは仏行に等しいのであり、成仏できるというものであった。藤吉慈海氏は、

職場での各自の職業に精進することが成仏の道であると教え、仏教的な職業観を確立したことは正三の卓見であった^⑩。

と述べている。正三の時代は厳しい身分社会であり、武士が最上位の階級であって、農民、職人、商人は下級の職業と蔑まれていた。それにもかかわらず、正三は堂々と職業的な平等をいい、むしろ曼荼羅のような職業観を打ち出している。そして勤労は、我執の念を除き、本来の仏心を磨きだす修行の意味を持ち、まさに自己を救済する営みと把握している。したがって、自分の職業に愚痴や不平をいうのは愚かであっ

て、「天職」という自覚を持っていくべきである。この点で、確かに正三の経済倫理としての職業倫理は、西欧のそれと相通ずるものであるということができる。

鈴木正三の思想は、基本的に「世法即佛法」に基づく禁欲的な職業倫理である。彼は、すべての職業を、修行として自己を磨いて、自己を救済していくべきものであると見なしている。こうした職業倫理すなわち経済倫理は、現在の日本人の心の中にも生き続けていると考えられる。

1 『仮名法語集（日本古典文学大系83）』（岩波書店、昭和三九年）、二六二―二六三頁。以下、『万民徳用』からの直接・間接の引用はこの書からとする。

2 『華嚴経』第一九卷（大正蔵、一〇卷一〇五中）。

3 『華嚴経』第五四卷（大正蔵、一〇卷二八五中）。

4 『仮名法語集』、二七六頁。

5 中村元『近世日本の批判的精神』（春秋社、昭和四〇年）、九三頁。

6 今井淳『近世日本庶民社会の倫理思想』（理想社、昭和四一年）、五六―五七頁。

7 『仮名法語集』、二七七―二七八頁。

8 中村元『日本宗教の近代性』（春秋社、昭和三九年）、一五七頁。

9 芹川博通『いまなぜ東洋の経済倫理か』（北樹出版、平成一年）、六一頁。

10 藤吉慈海『鈴木正三の禪』（禪文化研究所、昭和五九年）、一七五頁。

〈キーワード〉

鈴木正三、経済倫理、職業倫理、世法即仏法、『万民徳用』、正直の道

（福島工業高等専門学校助教授）

退会に関する内規

- (1) 会員は、学会本部に届け出た上で、いつでも退会することができる。
- (2) 会費を三年間滞納した者は、退会したものと認める。
- (3) 会の名譽を著しく害なう等、会員として不適当と認められる者については、理事会の決定により退会させることができる。
- (4) 本内規の変更は理事会の議決による。
- (5) 本内規は昭和五十四年九月十一日より実施、平成五年五月二十二日より改定施行する。

144. Dōgen's Concept of the Word "Buddha Nature" in the *Busshō* Fascicle of the *Shōbōgenzō*

Kiyozumi ISHII

In this paper, I would like to confirm how Dōgen defines the word *Busshō*, or Buddha Nature, in the *Busshō* fascicle of the *Shōbōgenzō*. I conclude that the word *Busshō* has a meaning similar to the word *Daigo*, or the Great Attainment, in the *Daigo* fascicle of the *Shōbōgenzō*. It indicates the attribute of the whole world as Buddha, and its individual emergence as any phenomena could be called *Shujō*, or Sentient Being. Though this definition might be unique in Buddhist thought, it is a specific aspect of Dōgen thought.

145. On the Economic Ethics of Suzuki Shosan

Akira KASAI

The purpose of this paper is to consider the economic ethics of Suzuki Shosan. Economic ethics means vocational ethics, and Suzuki explained vocational ethics in his main published work *Banmin Tokuyō*. His vocational ethics was based on the principle that worldly things are Buddhism. He looked on one's vocation as the other self of the Buddha. Every vocation as training improves one and relieves his mind. There is a Japanese vocational ethics. It continues living in the Japanese mind.

146. The Twenty-five Historical Holy Places of St. Hōnen's Activities and the Ōsaka-kō

Hiroko YAMAMOTO

In research up to now, it was thought that the twenty-five historical holy places of St. Hōnen's activities were established and pilgrimage developed only by the effort of the priest Reitaku. However, in Reitaku's own "*Guide book to twenty-five historical holy places related to the great master Enkō*"